



— 後藤新平の技術者を活かした震災復興の手法に学ぶ—

平成24年10月1日

特定非営利活動法人建設技術監査センター

理事長 五艘章 (技術士：総合監理・建設部門)

東京都市大学柏門技術士会 相談役

土木学会フェロー、公共工事事品質確保技術者(I)

東日本大震災から1年半が経過するも未だ東北復興計画はその姿を現していない。被災者の苦悩の生活と望郷の願いに応え、一日も早く東北100年の復興計画を示す事が政治家、科学者・技術者の責任である。我がNPO法人建設技術監査センターは建設技術調査、PDB発注者支援業務等を通して公益貢献に取り組んでいるが、我が国の崩壊も予測されている首都圏直下型地震の防災事業に技術者集団として貢献する事を願っている。ここに関東大震災(1923年)の後、数日にして東京帝都復興計画を立案した後藤新平(1857～1929)を紹介したい。

後藤は関東大震災の直後に組閣された第2次山本内閣の内務大臣兼帝都復興院総裁として震災復興計画を立案した。それは大規模な区画整理と公園・幹線道路の整備を伴うもので、13億円という当時の国家予算の約1年分に相当する巨額の予算のため財界等からの猛反対に遭い、結局議会在承認した予算5億7500万円で当初計画を縮小した復興事業は1930年(昭和5年)に完成をみた。之が現在の東京都の都市計画の根幹を成している。

設計に当たっては復興帝都にふさわしい意匠を成すために外国事例や画家や作家などの意見を聞くなどして、建築家野田俊彦の「全て同一形式」意見を一蹴。逓信省の営繕部局に勤務する建築家スタッフをスカウトして太田圓三、田中豊、山田守、山口文象などによる設計組織を形成する。復興局が手がけた橋の数は100以上に及び、帝都の門たる第一橋梁の永代橋はアーチ橋、第二橋梁の清洲橋はライン川にかかるケルンの吊橋をモデルとする柔らかさを感じさせる案を採用、相生、永代、清洲、両国、蔵前、厩、駒形、吾妻、言問の9橋に加え、震災に耐えた新大橋を加えた隅田川十橋は橋の博覧会ともいえるような状況が生じた。こうして隅田川の橋梁群は個々の橋が多様なデザインを主張しながら、全体として都市景観に高いシンボル性をもたらすこととなる

小学校を地域コミュニティーの単位として扱い、不燃化・耐震化された鉄筋コンクリートの校舎と避難所ともなる小公園をセットで、それぞれを防災都市における各地域のシンボルとするべく、東京市内52箇所を設置した

虎ノ門事件の責任を取らされ内務省を辞めた正力松太郎が読売新聞の経営に乗り出したとき、上司(内務大臣)だった後藤は自宅を抵当に入れて資金を調達し何も言わずに貸した。その後、事業は成功し正力が借金を返そうとしたが、もうすでに彼は他界していた。正力は恩返しとして後藤の故郷である水沢町(当時)に借りた金の2倍近い金を寄付した。この資金を使って、1941年に日本初の公民館が建設された。

後藤は地下鉄の父・早川徳次の「東京に地下鉄を作りたい」という構想に数少ない理解者に名前を連ねている。鉄道省や自治体は「東京の軟弱地盤の地下に構造物を建設することは技術的・資金的に無理である」として全く理解を得られない中、橋の建設で使われた地層図を取得し、軟弱な地層の下の固い地層に建設すれば問題がないこと、豆を使った交通量調査等を説得材料に、賛同者を募り投資家や金融機関への粘り強い説得で独力で、大正8年に鉄道院から地下鉄営業免許を取得する。大正14年に浅草～上野間(現在の銀座線)の地下鉄工事に着手し、関東大震災や難工事による多発した事故等、数々の困難を乗り越え、昭和2年に開業させた。

江戸時代後期・蛮社の獄で投獄された蘭学者・高野長英を母方の大伯父にもつ後藤の手法は、『徹底した調査事業により現地の状況を知悉した上で経済改革とインフラ建設を強引に進める』ものである。後藤は自ら『生物学の原則』に則った手法であると説明している(比喻で「ヒラメの目をタイの目にするには出来ない」と語っている)。それは「社会の習慣や制度は、生物と同様で相応の理由と必要性から発生したものであり、無理に変更すれば当然大きな反発を招く。現地を知悉し、状況に合わせた施政を行うべきである」というものだった。

後藤新平が死の床で遺した言葉と柔道創始者・嘉納治五郎の教育観を併せて紹介して拙文を締め括りたい。

後藤新平

『金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ』

嘉納治五郎

『教育のこと、天下之より偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育 遠く百世に及ぶ』

(出展：ウィキペディア)